

B表ライセンス受検 総合 5年

# 祭りを柱としたコミュニティ・スクール実現へ 1000年先の未来へつなぐ TOSS 型祭り教育の提案 ～未来へつなぐ松原神社例大祭～

breaktrivialk2105022@yahoo.co.jp

法則化一刻館/法則化小田原疾風(代表)/TOSS和/TOSS横浜/谷企画 A チーム 山崎克洋(3級)

## 1 主張

祭りを柱とした地域とともにある学校『コミュニティ・スクール』を実現し、地域から消え始めている祭りの文化を、次の世代へとつなげていく人材を育成する TOSS 型祭り教育を提案する。

全国に祭りは30万あると推計されている。その祭りが現在、次々と危機に瀕している。祭りを存続できない、存続していたとしても、その祭りを支えているのが高齢者ばかりの地域も多い。そのような中で、地域の文化である祭りを次の世代につないでいく必要性を子どもたちに教えていくべきだと考えた。しかし、現実的に祭りの魅力を伝える場は学校外の地域にあり、そのコミュニティは崩れ始めている。また、学校教育の中では、祭りについて教える場がほとんど位置付けられていない。

そこで、新学習指導要領でも出されている地域とともにある学校『コミュニティ・スクール』を実現するための手立てとして、祭りを活用していくことを提案したい。途絶え始めている祭りによる地域のつながりを、学校が中心となって文化の継承をしていく場にしていくことで、本当の意味での地域とともにある学校を実現できるはずだ。そして、そのことが、地域から消え始めている祭りの文化を、次の世代につなげていくような人材育成につながっていくと考えた。

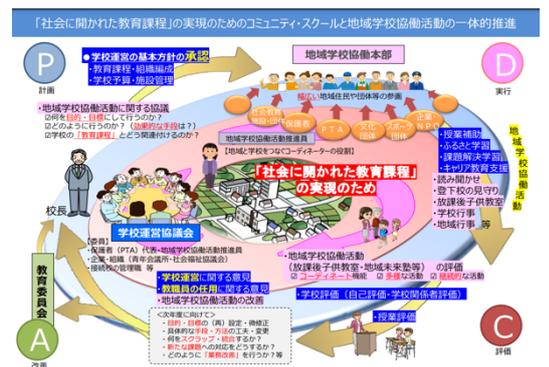
私の勤務する三の丸小学校の学区においても、『松原神社例大祭』という祭りの担い手が減っている現状がある。子どもたちの口からも「神輿の担ぎ手がいなくて、神輿を担ぐことがなくなった。」といった話も出てきている。だからこそ、地域の祭りである『松原神社例大祭』、そして、その祭りが地域にとってどのような価値があるのかを教えていくことを通して、祭りの存在意義について考えさせたい。そして、そのような祭りの文化を存続していくことについて、『コミュニティ・スクール』という視点に立ち、日本全体として取り組んでいく必要性について提案する。

## 2 祭りとは

「まつり」という言葉は「祀る」の名詞形で、本来は神を祀ること、またはその儀式を指すものである。この意味では、個人がそういった儀式に参加することも「まつり」であり、現在でも地鎮祭、祈願祭などの祭がそれにあたる。日本は古代において、祭祀を司る者と政治を司る者が一致した祭政一致の体制であったため、政治のことを政(まつりごと)とも呼ぶ。また、祭祀の際には、神霊に対して供物や行為等、様々なものが奉げられ、儀式が行われる。その規模が大きく、地域を挙げて行われているような行事の全体を指して「祭」と呼ぶこともある。しかし宗教への関心の薄れなどから、祭祀に伴う賑やかな行事の方のみについて「祭」と認識される場合もあり、元から祭祀と関係なく行われる賑やかな催事、イベントについて「祭」と称されることもある。

「まつり」や「まつる」という古語が先であり、その後、漢字の流入により「祭り」・「奉り」・「祀り」・「政り」・「纏り」などの文字が充てられた。現在は「祭りと祀り」が同義で「祀りと奉り」が同義ともいわれるが、漢字の由来とともに意味も分かれているので下記に記す。

「祀り」は、神・尊(みこと)に祈ること、またはその儀式を指すものである。これは祀りが、祈りに通じることから神職やそれに順ずる者(福男・福娘や弓矢の神事の矢取り)などが行う「祈祷」や「神との交信の結果としての占い」などであり、いわゆる「神社神道」の本質としての祀りでもある。この祀りは神楽(かぐら)などの巫女の舞や太神楽などの曲芸や獅子舞などであり、広く親しまれるものとして恵比寿講などがある。その起源は古神道などの日本の民間信仰にもあ



り、古くは神和ぎ（かんなぎ）といい「そこに宿る魂や命が、荒ぶる神にならぬよう」と祈ることであり、それらが、道祖神や地蔵や祠や塚や供養塔としての建立や、手を合わせ日々の感謝を祈ることであり、また神社神道の神社にて祈願祈念することも同様である。

「祭り」は命・魂・霊・御霊（みたま）を慰めるもの（慰霊）である。「祭」は、漢字の本来の意味において葬儀のことであり、現在の日本と中国では祭りは正反対の意味と捉えられているが、慰霊という点に着眼すれば本質的な部分では同じ意味でもある。古神道の本質の一つでもある先祖崇拜が、仏教と習合（神仏習合）して現在に伝わるものとして、お盆（純粋な仏教行事としては釈迦を奉る盂蘭盆があり、同時期におこなわれる）があり、辞書の説明では先祖崇拜の祭りと記載されている。鯨祭りといわれる祭りが、日本各地の津々浦々で行われているが、それらは、鯨突き（捕鯨）によって命を落としたクジラを慰霊するための祭りである。

「奉り」は、奉る（たてまつる）とも読み、献上や召し上げる・上に見るなどの意味もあり、一般的な捉え方として、日本神話の人格神（人の肖像と人と同じような心を持つ日本創世の神々）や朝廷や公家に対する行為をさし、これは、神社神道の賽神の多くが人格神でもあるが、皇室神道に本質がある「尊（みこと）」に対する謙讓の精神を内包した「まつり」である。その起源は、自然崇拜である古神道にまで遡り、日本神話の海幸彦と山幸彦にあるように釣針（古くは銚も釣針も一つの概念であった）や弓矢は、幸（さち）といひ神に供物（海の幸山の幸）を「奉げる」神聖な漁り（いさり）・狩り（かり）の得物（えもの・道具や神聖な武器）であった。古くから漁師や猟師は、獲物（えもの）を獲る（える）と神々の取り分として、大地や海にその収穫の一部を還した。このような行いは、漁師や猟師だけに限らず、その他の農林水産に係わる生業（なりわい）から、現在の醸造や酒造など職業としての神事や、各地域の「おまつり」にもあり、地鎮祭や上棟式でも御神酒（おみぎ）や御米（おこめ）が大地に還される。

「政り」については、日本は古代からの信仰や社会である、いわゆる古神道において、祭祀を司る者（まつり）と政治を司る者（まつり）は、同じ意味であり、この二つの「まつり」が一致した祭政一致といわれるものであったため、政治のことを政（まつりごと）とも呼んだ。古くは卑弥呼なども祭礼を司る巫女や祈禱師であり、祈禱や占いによって執政したといわれ、平安時代には神職が道教の陰陽五行思想を取り込み陰陽道と陰陽師という思想と役職を得て官僚として大きな勢力を持ち執政した。またこうした政と祭りに一致は中央政府に限らず、地方や町や集落でも、その年の吉凶を占う祭りや、普請としての祭りが行われ、「自治としての政」に対し資金調達や、吉凶の結果による社会基盤の実施の時期の決定や執政の指針とした。

### 3 日本の祭り

日本の祭礼は、神道系に分類されるものが多いが、民間信仰色の強いものも多く、道教や仏教など渡来の習俗の影響を受けているものも多い。現在一般的な意味での祭りは、神社や寺院をその主体または舞台として行われることが多い。その目的や意義は、豊作の「五穀豊穡」を始め、「大漁追福」、「商売繁盛」、「疫病退散」、「無病息災」、「家内安全」、「家寧長寿」、「夫婦円満」、「子孫繁栄」、「祖先崇拜」、「豊楽万民」、「天下泰平」などを招福祈願、厄除祈念として行われるもの、またはそれらの成就に感謝して行われるもの、節句などの年中行事が発展して行われているもの、偉人の霊を慰めるために行われるものなど様々である。その目的により開催時期や行事の内容は多種多様なものとなっている。また同じ目的、祭神の祭りであっても、祭祀の様式や趣向または伝統などが、地方・地域ごとに大きく異なる場合も多い。



祭の目的が時代の変化によって参加者達の利害とは離れてしまったものも多く、行事の内容も社会環境の変化等により変更を余儀なくされた祭もある。それらの結果、祭を行うことそのものが目的に成り代わっているような、目的から考えると形骸化した状況の祭も多い。このため、全くの部外者や、見物する者や参加する者という当事者にとっても「祭＝楽しいイベント（お祭り騒ぎ）」という程度の認識しか持たれないことが多く、祭のために仕事を休むということは、例えば葬儀のためにということなどと比べると遥かに理解が得られにくい状況にある。

一般的に神社における祭礼には、神輿（神様の乗り物）をはじめとして山車・太鼓台・だんじりなどの屋台などが出されることが多く、これらは地方によって氏神の化身とみなされる場合や、または神輿を先導する露払いの役目を持って町内を練り歩き、それをもて

なす意味で沿道では賑やかな催しが行われる。また、伝統などの違いにより例外もあるが、多くの祭りにおいては工夫を凝らした美しい衣装や化粧、厚化粧を施して稚児、巫女、手古舞、踊り子、祭囃子、行列等により氏子が祭礼に参加することも多い。今日では世俗化も進んでいるが、今なお祭の時は都市化によって人間関係の疎遠になった地域住民の心を一体化する作用がある。変わらない日常の中に非日常の空間を演出することによって、人々は意味を実感する喜びを続けてきたのである。

基本的に神事としての祭りは厳粛な場面と賑やかな場面の二面性を持ち、厳粛な場面では人々は日常よりも厳しく、伝統や秩序を守ることを要求される。しかし一方で、日常では許されないような秩序や常識を超えた行為（ふんどし一丁、男性の女装等）も、「この祭礼の期間にだけは」伝統的に許されると認識する地方が多く、そのため賑やかな場面を指して「お祭り騒ぎ」などの言葉が派生している。仏教の影響を受けた神仏習合の色が濃いものとしては土着の祖霊信仰や言霊の呪術性を帯びた念仏踊りを取り入れた盆踊りがあり、習合した盂蘭盆会に繋がる。また、神事から発達した田楽・猿楽などが能など後の日本中世伝統芸能を形作る素地となった。



#### 4 小田原市の『松原神社例大祭』

ゴールデンウィークの5月3日から5日にかけての3日間、町内の神輿が集結。浜降りや市街地を突っ駆けるさまは勇壮で、他地域ではあまりみられないスタイルのお祭りである。松原神社は、小田原北条氏（つまり戦国時代）以降、歴代城主が崇敬してきた小田原の総鎮守とされている。松原神社例大祭は、漁師の祭を起源とする「小田原担ぎ」という独特の神輿の担ぎかたが特徴で、漁場での作業を陸地で再現した形になっている。小田原の松原神社例大祭の特徴である『木遣り』『小田原担ぎ』『宮入り』について以下に詳しく書く。

##### ◆木遣り

神輿を船に見立て、まず神輿を静止した状態で、木遣り（きやり）を唄う。木遣りとは、漁師が船を砂地に陸揚げする時や、漁網を一気に揚げる時など、集中して力仕事を行う時に、船頭が音頭を取って、息を合わせながら作業をするために唄う浜唄で、正式には「浜木遣り」という。現代の様に機械で網を巻き上げるのではなく、何艘もの漁船が網の周りを囲んで、一斉に定置網を人の手で引き上げていた。この時、全員の息が合わないと網が傾いて魚が獲れないため、引き手は掛け声を必要とし、木遣りが生まれた。木遣りが始まると網を引かず、唄が一番ずつ終わった瞬間に、勢いをつけて全員一斉に網を引き、徐々に網が重くなってくと引き手が疲れてくるので、そこでまた木遣りが始まり網引きを止め、その繰り返しで引き上げた。昔は海に落ちて亡くなる漁師も多く、漁は命がけの仕事だった。そのため、木遣り唄には神を祀る唄も多く、命の唄であり神聖なものでもある。



##### ◆小田原担ぎ

木遣りが終わるやいなや、「オイスアー」「オリャサー」という掛け声とともに、神輿は勢いよく数十メートル突っ駆け、高張りという提灯を持った若い衆の前でピタリと静止する。これは、漁船が漁場まで短時間で移動する様子を表しており、この静と動の担ぎ方こそ小田原担ぎの最大の特徴。また、民家や商店、地区の祭礼事務所・神社などに、木遣りとともに神輿を担いだまま跳ぶ（走る）さまは全国的にも珍しいものである。（神輿を担いだまま走ることを小田原では「跳ぶ」とか「突っ駆ける」と言う。）また、御魂（みたま）が入っている時に揺らすことは荒波を意味するので行わない。掛け声も一般的な「ワッショイ」ではなく、漁で網を引き上げる時に使った交互の掛け合いからきているため、「オイスアー」「オリャサー」となっている。



◆宮入り

5月3日は午後4時から「御魂入れ」といって、各町内の御輿に神様を入れる儀式がある。4日は本社神輿が神幸祭により「御魂入れ」を行った後、「宮出し」と呼ばれる町内渡御が斉行される。また、千度小路龍宮神社と古新宿龍宮神社の神輿が、それぞれ4日と5日に「汐（しお）ふみ」と呼ばれる浜降りを行う。浜降りでは、神輿が浜に続々と降り、波打ち際を歩き、その後砂浜ですべての神輿が並び、順番に海に向かって突っ駆ける。そして、5日夕刻の宮入りは、例大祭のクライマックスとなる。夕方になると、各町内の30基近くの神輿が松原神社周辺に集結。まずその年の年番町内神輿が参道を勢いよく突っ駆け宮入りした後、順々に各町内神輿が、結びに本神神輿が宮入り。これが3時間あまり続く。3日間にわたり神輿を担ぎ続けた担ぎ手たちが、最後の力を振り絞って、突っ駆け宮入りする姿は、圧巻である。

この松原神社例大祭は、旧小田原宿26町内の氏子衆（宮入り順番表の上記写真参照）と千度小路古新宿の2つの龍宮神社により行われるが、松原神社と並び小田原城下の三大明神と呼ばれる居神神社、大稲荷神社、それに隣地区の山王神社も、今は同じ時期に例大祭が行われているため、ゴールデンウィークは町中がお祭り騒ぎになっている。小田原市内には、ほかにも木工・木地挽き職の多い地区、農業地区、樹木を扱う地区など各所で、それぞれの生活風土に根ざしたお祭りがたくさんあり、昔から世代を超えた地域のつながりを強める大事な役割を担っている。



5 祭りがなくなることによる問題と国としての方針 文化芸術立国

祭りがなくなることによる問題は様々考えられる。

- ・伝統的な地域文化の喪失
- ・地域のコミュニティの崩れ
- ・地域のつながりが薄れ、災害時に協力し合う環境がなくなる
- ・地域経済の停滞
- ・地域の教育力の低下
- ・防災、防犯の力の低下

**祭りの現状（事例）**  
日本を代表する青森ねぶた祭や徳島阿波踊りでさえ、運営に関して多くの課題を抱えている状況に。

**青森ねぶた祭**

- 経済波及効果は238億円に減少
- 観客動員数は20年で3割減少 380万→250万人
- 2016年は収支が赤字

**徳島阿波踊り**

- 観客動員数は120万人
- 累積赤字は約4.4億
- 徳島市観光協会の破産申請

**祭りの現状**

- 全国約30万件の祭があり、日本は世界的にも「祭大国」
- ボランティアで運営される多くの祭は年々衰退の一途

**祭りの課題**

- ヒト** 少子高齢化 担い手不足
- モノ** マンネリ化 集客力低下
- カネ** 応援者減 資金不足
- PR** 域外で認知度PR不足

**地域文化・コミュニティ衰退、地域経済の停滞**

これらの問題は、もちろん祭りだけに起因するわけではない。しかし、日本人がこれまでつないできた伝統である『祭り』が衰退することは、これらの問題をより深刻にしていくことにもつながる。

例えば、先日ニュースにもなった徳島県の阿波踊りは、累積赤字が4億3000万円を抱えている状態で、徳島市観光協会が破産申請をした。あれほど大きな規模の祭りですえ、実施が危ぶまれていくのであれば、当然他の小さな祭りについても、運営が厳しくなるのは目に見えている。経済効果の現象だけでなく、祭りに関わる人が減ることは、地域の活力をどんどん低下させていくことになる。

このような衰退してきている祭りという日本の伝統文化を続けていくために、国としても方針を掲げている。文部科学省では、次のような方針を示している。

◆2020年に向けた文化政策の戦略的展開

我が国は、諸外国を魅了する有形・無形の文化財を有しているとともに、日本人には地域に根付いた祭りや踊りに参加する伝統があります。また、我が国では、多様な文化芸術活動が行われるとともに、日常においても、稽（けい）古事や趣味などを通して様々な文化芸術体験が盛んに行われてきました。

こうした日本の文化財や伝統等は、世界に誇るべきものであり、これを維持、継承、発展させることはもとより、日本人自身がその価値を十分に認識した上で、国内外への発信を、更に強化していく必要があります。

また、経済成長のみを追求するのではない、成熟社会に適合した新たな社会モデルを構築していくことが求められている中、教育、福祉、まちづくり、観光・産業等幅広い分野との関連性を意識しながら、それら周辺領域への波及効果を視野に入れた文化芸術振興施策の展開がより一層求められています。

他方で、人口減少社会が到来し、特に地方においては過疎化や少子高齢化等の影響、都市部においても単身世帯の増加等の影響により、地域コミュニティの衰退と文化芸術の担い手不足が指摘されています。また、昨今の経済情勢や、厳しさを増す地方の財政状況などからも、地域の文化芸術を支える基盤の脆（ぜい）弱化に対する危機感が広がっています。文化芸術が生み出す社会への波及効果を、こうした諸課題の改善や解決につなげることも、求められています。

2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会は、我が国の文化財や伝統等の価値を世界へ発信するとともに、文化芸術が生み出す社会への波及効果を生かして、諸課題を乗り越え、成熟社会に適合した新たな社会モデルの構築につなげていくまたとない機会です。

我が国は、このような認識の下、文化芸術の振興を国の政策の根幹に据え、「文化芸術立国」を目指して、文化芸術の振興に取り組んでいます。

文化芸術立国として、どのように文化をつないでいくと同時に、その文化を発信していくといことが、ますます求められていく。

国としても取り組みとして、いくつかのことは実施している。例えば、日本の文化を後世に残すための、文化遺産オンラインというものを立ち上げた。これらは祭りのような無形文化遺産をデジタルデータとして残していく取り組みである。

また、「日本遺産 (Japan Heritage)」認定の仕組みを新たに創設し、歴史的魅力に溢れた文化財群を地域主体で国内外に戦略的に発信するなど、地域の複数の文化財を総合的かつ一体として活用する取組の支援を行っている。これらの取り組みに加えて、地方公共団体等との連携による、我が国の文化遺産のユネスコ世界文化遺産やユネスコ無形文化遺産への推薦・登録の積極的な推進、登録後の文化遺産の適切な保存・活用・継承等への取組等も実施している。



日本遺産「加賀前田家ゆかりの町民文化が花咲くまち高岡一人、技、心一」構成文化財「山町筋を巡行する高岡御車山」

6 祭りの伝統をつないでいく 全国的な取り組み事例

◆NPO 日本の祭りネットワーク

日本全土に広がる祭りを支援・取材・研究して日本文化の未来への継承を図るとともに、祭りの情報や映像を国内外に発信して国内外からの観光客を地方に導入し、自らが故郷の文化を誇り、地域を元気にする運動を展開している。具体的には次のような取り組みを実施している。

- ①日本の個別の祭り認知促進
- ②地域の集客増による、祭りと地域の活性化
- ③日本の祭りの取材・研究・教育
- ④日本の祭りの取材・研究・教育
- ⑤日本の祭りのデータのアーカイブ化による後世への伝承
- ⑥日本の祭りの組織化による、祭り間の相互コミュニケーションの活性化
- ⑦日本の祭りの魅力を国内外へ情報発信
- ⑧日本の祭りをテーマとした催事の支援と後援
- ⑨日本の祭りに関する講演会・勉強会等による地域の魅力の再確認

◆オマツリジャパン

オマツリジャパンは、お祭りを盛り上げることで日本を盛り上げる、世界初のお祭り専門会社。人と人のつながり、ワクワク感、地域の魅力発信、経済活動を活性化する取り組みを実施している。伝統的な文化を残すという側面もあるが、それ以上に、お祭りを魅力ある観光資源として捉えている部分が多い。主に3つのビジョンをかかげている。

- ①お祭りに関わる主催者、参加者、地域、企業を豊かにし、地域の活性化に最大限貢献する。
- ②「お祭り大国 日本」を確立し、お祭りの魅力を世界に発信する。お祭り目的の訪日外国人を増やす。
- ③映画館や公園に行くのと同じように、お祭りに行くという選択肢を増やす。

◆六本木 朝日神社の取り組み

31年ぶりに子ども神輿を復活させた取り組み。朝日神社の禰宜 綿引 崇さんが中心になって「こども神輿山車修繕事業」と銘打ち、地域の方々にこども神輿の復活について説明をした。当初は反対する意見もあったが、少しずつ賛同の声とともに寄付が集まり、観光などで六本木を訪れた人たちも協力してくれるようになっていった。古くからの住民、新しいレジデンスの住民、昔からの地元企業、新しく地元企業となった IT 会社など、さまざまな方が神輿の修繕事業を支えてくれて、何とか神輿が修繕され、子ども神輿が復活した。昨年の復活初回のお祭りでは、2歳のお子さんから小学校の高学年まで、86名のお子さんが参加。六本木の道々に「わっしょい」の声が響いた。

◆地域以外の参加者を受け入れる取り組み

地域の伝統である祭りを守るため、外部からの人を受け入れる取り組みが増えてきている。

例えば、北海道渡島半島の八雲町・熊石地区。江戸時代から約400



域外参加者を受け入れる主な伝統的祭り	
祭りの名称	内容(2015年)
根崎神社例大祭 (北海道八雲町)	ネット初公募。札幌市の学生4人が応募、山車引きなどに参加
神田祭 (東京都千代田区)	須田町中部町会が元祖女みこしの参加者を一般公募。約180人の女性が参加
飯田町灯籠山祭り (石川県珠洲市)	域外の約20人(外国人留学生6人)が山車(灯籠山)引きなどに参加
じじくれ祭り (福井市)	早朝から神輿を作り、担ぎ、夕刻に解体する祭り。県内外の約20人が参加
椿山太鼓踊り (高知県仁淀川町)	落人伝説に基づく。地区外の青年団員や地区出身者らが参加。町も資金支援

年続く根崎神社の例大祭で、札幌市の学生が笛の音と掛け声とともに山車を引いていた。熊石地区の人口はこの10年で3割弱減り、少子高齢化が一気に進んだ。そのため、昨年からは、祭りを維持するため、域外の参加者を受け入れた。今年はネットも活用し、地域伝統芸能活用センター（東京・中央）が4月に開設した参加者募集サイト「まつりーと」を通じて、札幌大谷大学の学生4人が応募した。参加した佐々木美莉さん（21）は「町が一丸となって取り組む祭りに参加したことがないので新鮮。地元の人と一体感を味わえて楽しい。今後、他の地域の祭りにも参加したい」と話す。

福井市の美山地区では約900年の歴史を持つ「じじぐれ祭り」が毎年5月に開かれる。早朝から木材で「柴（しば）神輿」を作り、担ぎ歩いて夕刻に解体する。人手不足に「伝統を絶やしてはいけない」と2年前から県外出身者と県が連携し、県内外から参加者約20人を集めている。友人の誘いで今年参加した兵庫県の会社員、森本晃二郎さん（43）は「素朴でありながら荘厳。一致団結できるのいい。来年も参加したい」と話している。

このように地域以外の人に参画してもらい、祭りを存続させるケースは全国でこれから増えていくことが予想される。

## 7 小田原市としての現状と取り組み

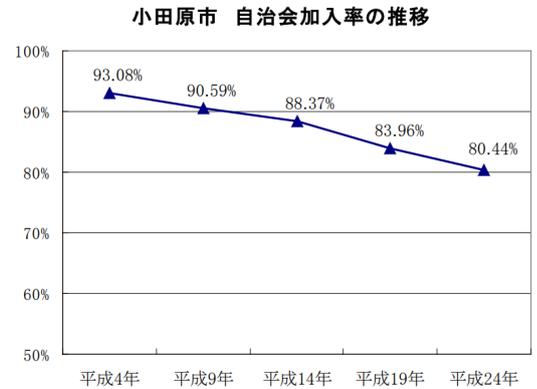
小田原市も全国同様祭りに関わる人口は減少しつつある。とりわけ子どもたちが祭りに参加しないケースが増えてきている。この大きな要因は、自治会や子ども会への加入率が減少していることだ。

例えば、右のグラフは小田原市内の自治会加入率の推移である。このグラフからも分かるように自治会に参加している家庭は年々減少している。これとどうように減少しているのが、子ども会への加入率である。子ども会に参加している児童の数は、小田原市内の全児童の半数以下となっている。このような状況から、自治会や子ども会が主体となって関わってきた、地域の祭りが衰退してきている状況がある。

勤務校の三の丸学区においても同様の現象が起きており、39名の児童のうち、子ども会に加入している児童は18名であった。そのため、クラスの半数以上の子は、お神輿を担いだ経験がなかった。このような状況からも、祭りの文化は衰退の一途をたどることが予想される。

小田原市内の取り組みとしては、自治会や子ども会への加入率を上げるため、各家庭への呼びかけ等は実施しているが、それほど成果が出ているとは言えない。また、小田原には「小田原民俗芸能保存協会」があり、小田原の各地域の民俗芸能保存会のメンバーが加入して、民俗芸能の保存と継承に取り組んでいる。そのような活動の一年の総仕上げとして、毎年年末に「後継者育成発表会」を小田原市民会館大ホールで開催している。ただ、これらの活動についても、市民に認知されているかというところではない。

また、市民団体として、かまぼこ通り活性化協議会が『宿場祭り』という祭りを実施したり、小田原城の敷地を利用しての市民団体による祭りは、盛んに行われている。しかし、その一方で地域に何百年と伝わってきた伝統的な祭りについては、携わる人が減り、お神輿をかつく担い手にも減少している。



## 8 コミュニティ・スクールとは

コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）は、学校と地域住民等が力を合わせて学校の運営に取り組むことが可能となる「地域とともにある学校」への転換を図るための有効な仕組みである。コミュニティ・スクールでは、学校運営に地域の声を積極的に生かし、地域と一体となって特色ある学校づくりを進めていくことができる。

学校運営協議会の主な役割として、

- 校長が作成する学校運営の基本方針を承認する
- 学校運営に関する意見を教育委員会又は校長に述べることができる
- 教職員の任用に関して、教育委員会規則に定める事項について、教育委員会に意見を述べることができる。

の三つがある。

文科省から出されている答申においても、繰り返しコミュニティ・スクールや社会教育の必要性について述べられている。

社会教育を通じた「人づくり」や「つながりづくり」は、それ自体が一人一人にとって大きな意義を有するものであるとともに、人口減少時代の地域が直面する様々な困難な状況の中で、地域を活性化し、住民が主体的に課題を発見し共有し解決していく持続的な「地域づくり」につながっていく意義を持つものであることに留意する必要がある。さらに、学びを学びで終わらせるのではなく、その成果を地域の活動の中で積極的に生かすことは、誰かの役に立っているという喜びをもたらす、より積極的に地域の活動に参画する熱意や、更なる課題解決のために新たな学びを求めるといった、持続的な学びと活動の循環につながっていく。人生100年時代を迎え、家族や学校、仕事に加え、地域での生きがいある活動に世代を問わず参加することは、一人一人の人生をより充実したものとする上で大きな意義を持つと考えられる。

【平成30年12月21日 中央教育審議会人口減少時代の新しい地域づくりに向けた社会教育の振興方策について（答申）】

教育基本法第13条は「学校、家庭及び地域住民その他の関係者は、教育におけるそれぞれの役割と責任を自覚するとともに、相互の連携及び協力を努めるものとする。」と規定している。また、学校教育法第43条は「小学校は、当該小学校に関する保護者及び地域住民その他の関係者の理解を深めるとともに、これらの者との連携及び協力の推進に資するため、当該小学校の教育活動その他の学校運営の状況に関する情報を積極的に提供するものとする」と規定している。これらの規定が示すとおり、学校は地域社会を離れて

は存在し得ないものであり、児童は家庭や地域社会で様々な経験を重ねて成長している。地域には、都市、農村、山村、漁村など生活条件や環境の違いがあり、産業、経済、文化等にそれぞれ特色をもっている。こうした地域社会の実態を十分考慮して教育課程を編成することが必要である。とりわけ、学校の教育目標や指導内容の選択に当たっては、地域の実態を考慮することが重要である。そのためには、地域社会の現状はもちろんのこと、歴史的な経緯や将来への展望など、広く社会の変化に注目しながら地域社会の実態を十分分析し検討して的確に把握することが必要である。また、地域の教育資源や学習環境（近隣の学校、社会教育施設、児童の学習に協力することのできる人材等）の実態を考慮し、教育活動を計画することが必要である。なお、学校における教育活動が学校の教育目標に沿って一層効果的に展開されるためには、家庭や地域社会と学校との連携を密にすることが必要である。すなわち、学校の教育方針や特色ある教育活動の取組、児童の状況などを家庭や地域社会に説明し、理解を求め協力を得ること、学校が家庭や地域社会からの要望に答えることが重要であり、このような観点から、その積極的な連携を図り、相互の意思の疎通を図って、それを教育課程の編成、実施に生かしていくことが求められる。保護者や地域住民が学校運営に参画する学校運営協議会制度（コミュニティ・スクール）や、幅広い地域住民等の参画により地域全体で児童の成長を支え地域を創生する地域学校協働活動等の推進により、学校と地域の連携及び協働の取組が進められてきているところであり、これらの取組を更に広げ、教育課程を介して学校と地域がつながることにより、地域でどのような子供を育てるの 22 第 3 章 教育課程の編成及び実施 か、何を実現していくのかという目標やビジョンの共有が促進され、地域とともにある学校づくりが一層効果的に進められていくことが期待される。

【H29 年告示 学習指導要領 総則 第 3 章 教育課程の編成及び実施(り) 地域の実態】

地域と共にある学校を実現するにあたって、祭りは大きなきっかけとなる。祭りという地域に根付く文化を継承・発展していく仕組みをこのコミュニティ・スクールに位置付けることで、地域のつながりはより強固となっていく。

実際、コミュニティ・スクールの中で地域の祭りや地域のつながりを大切にしたい実践は始まってきている。

◆福岡県春日市教育委員会

春日市では、市内全校でのコミュニティ・スクールの実施をスタートさせている。その中で、とりわけ地域とのつながりを大切とした取り組みがいくつもある。夏祭りもその1つである。夏祭りの運営や祭りに関わる伝統的な文化を伝える学習会などを開催し、積極的に地域とつながった学校運営を市内で実施し始めている。

◆埼玉県 秩父市 吉田小学校・吉田中学校

秩父市では、『地域学校協働活動』という名称で、吉田地域の伝統文化である「龍勢」、「貴布祢（きふね）神社の神楽」を学び、伝統文化の継承に地域と一体となって取り組んでいる。

具体的には、吉田小学校では、「ミニ龍勢まつり」といって、毎年 2 月、3 年生の児童が「総合的な学習の時間」を活用し、「龍勢」について学んできた成果を発表する場がある。この学習は 10 月から始まり、毎週 10 名を超える吉田龍勢保存会の皆さんの指導のもと実施されている。

また、吉田中学校では、吉田小学校の取り組みを引き継ぎ、「総合的な学習の時間」を活用し、2 年生で埼玉県指定無形民俗文化財「貴布祢神社の神楽」、3 年生で「龍勢」の継承活動を行っています。

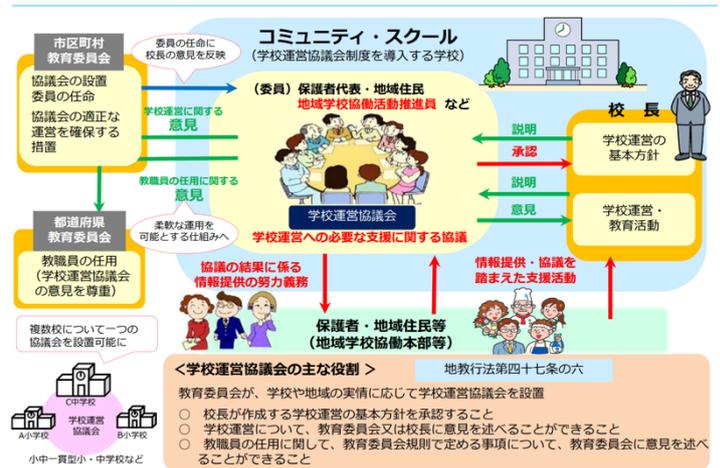
「貴布祢神社の神楽」は、10 月に行われる吉田中学校の文化祭で披露されます。ここで「神楽」を学んだ生徒たちが、将来の「貴布祢神社の神楽」を担う人材として育つことを願って取り組まれている。

このように、学校の教育課程の中に位置付けることや学校の行事と地域の行事をつなげていく中で、伝統文化である祭りや伝統的な芸能を引き継いでいく取り組みは行われ始めている。そして、それを通じて、地域のつながりがより強固になってきている地域もある。

9 小田原市立三の丸小学校の取り組み

小田原市の現状や三の丸小学校の学区にある松原神社例大祭へ参加者が減少しているという状況は、全国の抱える課題と同じだといえる。現在、そのような祭りの存続の危機を知った上で、三の丸小学校の 5 年生の子どもたちが自分たちでできることはないか、考え始めている。まずは、松原神社例大祭という祭り自体を知らない子どもたちが、祭りのことや神社というものについて知るという活動を実施した。

地教法改正後のコミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）の仕組み（H29.4～）



これには、松原神社の宮司の村上さんの協力のもと、実際に神社の境内に伺い、神社の歴史や祭りの内容についてなど詳しく教えて頂いた。

次に、その祭りに関わる伝統芸能をいくつか体験させて頂いた。例えば、『木遣り』がある。地域の祭りに深く携わっている方から直接、木遣りというものについて教えて頂いた。また、子どもたちの中で、『木遣り』が歌える子が中心となって、地区ごとに分かれて『木遣り』を歌う体験も行った。

このような体験を踏まえて、今度は自分たちが情報を発信する活動を実施する。祭りの現状やその魅力を、劇を通して、校内や地域の方に伝える取り組みを実施した。当日は、全校児童が参加する全部で3回公演の演劇と発表を行うなど大盛況の発表となった。さらに、ダイドードリンコの『日本の祭り』というBSの番組のためのCM制作に参加させて頂いた。子どもたちがオリジナルで考えたCMを作り、祭りへの参加を地域や全国の人たちへ伝えた。

また、これらの取り組みは、タウンニュース等のメディアにも取り上げられ、これらを見た人たちが松原神社例大祭に参加するきっかけとなった。さらに、一番の変化は、今まで参加することがなかった子どもたちの多くが松原神社例大祭に参加するようになったことである。自治会に入っていない子や子ども会に入っていない子も、保護者を説得して、祭りに参加する動きがあったことが一番の成果といえる。



### 小田原の子どもたちの取り組み



### 【コミュニティ・スクールとしての動き】

小田原市立三の丸小学校ではコミュニティ・スクールとして、学校運営協議会制度をスタートさせている。今回、学校運営協議会のメンバーである三の丸小学校のPTA 会長が松原神社の禰宜である村上彦氏ということから、地域の祭り『松原神社例大祭』の伝統をつなげていく取り組みを学校でもやっていくことが提案された。これは、5年生の子どもたちの取り組みがきっかけであり、PTA 主催のわくわくフェスタというイベントで、『祭り体験コーナー』が実施されることになった。現在6年生になった彼らがブースの運営にあたり、神輿や太鼓などを通して、祭りを伝承する取り組みを学校の行事として実施していくことは、全国的に見ても先進的な取り組みだと考えている。

三の丸小学校では、自治会や子ども会の加入率が減り、『松原神社例大祭』に参加するのみならず、その存在を知らない子どもや保護者も増えてきている現状があった。その意味で、学校が地域のハブになり、祭りという地域の文化をつなげていくことは、地域のつながりを生み出し、地域づくりの大きな一歩になると考えている。



## 9 TOSS 子ども祭り大使

子ども観光大使が地域の観光的な魅力を発信する取り組みであった。その中の1つとして、地域の祭りに特化した取り組みを実施していきたい。現在、TOSS 小田原として実施している伝統文化教室とも連携しながら、地域の祭りについて知り、それらの担い手になっていくような人材を育成する取り組みを行いたい。

### 令和元年度 伝統文化教室

- 第一回 小田原に伝わる 地域の祭りを知ろう。
- 第二回 小田原に伝わる 地域の祭りを体験しよう① 木遣り体験
- 第三回 小田原に伝わる 地域の祭りを体験しよう② 神輿体験
- 第四回 地域の祭りについて 学んだことを発信しよう。 絵手紙やミニ祭り動画

これらの取り組みをPTAの『わくわくフェスタ』などの行事で発表することや地域の祭りに本当に参加する取り組みにつなげていきたい。コミュニティ・スクールでも示したように、学校がハブとなることで、TOSS 子ども祭り大使のような外部団体とのつながりも接続しやすくなっていく。まずは、勤務校の『松原神社例大祭』に軸足を置いて、実践していきたい。

### 10 単元指導計画 (対象学年：5年 総合40時間 国語10時間)

第5学年 総合「未来へつなぐ 松原神社例大祭」全40時間 ※詳しい実践内容は学級通信に掲載

第一次 総合のテーマ決め ※国語と合科

第二次 松原神社例大祭について知ろう 松原神社で神主さんから話を聴く。

第三次 松原神社例大祭に関わるものについて体験しよう。

木遣り体験 お囃子体験 神輿体験

第四次 松原神社例大祭や日本の祭りの歴史や現状を知ろう。(本時)

第五次 松原神社例大祭を未来につなげていくために自分たちにできる取り組みをしよう。 ※国語と合科

CM作り、全校児童に向けた発表(演劇、クイズ、神輿体験、お囃子体験、衣装体験、祭り動画)

## 1.1 授業展開

2つの祭り何が違いますか？

神様がいくかいらないかで。日本の祭りは、もともと神事と呼ばれる行事でした。

神事は神様をもてなすことです。どんなおもてなしをしていますか？

お供え、歌、太鼓、舞

日本の祭りには神事ともう1つの側面があります。何ですか？

神輿

神輿、山車のように神様と見物人をもてなす行事を神賑わい行事と言います。

言ってごらん。

神賑わい行事

この神事と神賑わい行事を合わせて、初めて伝統的な祭りと言えます。

現在、日本の祭りは30万件あると言われています。そのうち、存続が難しい祭りが増えています。

何件くらいあると思いますか？

日本の祭りが存続の危機です。どうして祭りが存続できなくなっているのか？

人口が減少している、地域の自治会や子ども会に入る人が減っている、祭りの参加者が減っている。

私たちの住む小田原市の松原神社例大祭も同じ状況にあります。このままでいいと思う人？いやだめだ？

だめ。

祭りを未来につなぐために、私たちにできることは何か？

祭りに参加する、祭りについてPRする、祭りの魅力をホームページで知らせる。

三の丸小学校でも取り組みをスタートさせています。

子どもたちの取り組みを紹介

学校が中心となって、地域づくりをやっていきましょう。

### 【主な参考文献】

日本人とは何か 柳田國男／文部科学省 総則／文部科学省2020年に向けた文化政策の戦略的展開 答申／日本の祭りとお神賑  
森田玲／神道祭祀の伝統と祭式 沼部春友／先生も生徒も驚く日本の『伝統・文化』再発見①② 松藤司／祭礼辞典・神奈川県 倉林  
正次／天皇の祭り村の祭り 森田悌／神と祭りの世界 真弓常忠／47都道府県ビジュアル文化百科 伝統行事 神崎宣武／日本の  
神さまおもしろ小辞典 久保田裕道／みんなが知りたい！日本のユネスコ無形文化遺産が分かる本 カルチャーランド／未来の年表  
河合雅司／日本の少子化 百年の迷走 河合雅司／小田原市まち・ひと・しごと創生人口ビジョン／南足柄市を考える会ニュース／か  
まぼこ通り活性化協議会資料／縮充する日本「参加」が創り出す人口減少社会の希望 山崎亮／人口減少×デザイン地域と日本の大  
問題を、データとデザイン思考で考える。寛裕裕／人口減少社会という希望 コミュニティ経済の生成と地球倫理 広井良典／自治体  
がひらく日本の移民政策-人口減少時代の多文化共生への挑戦 毛受敏浩／地方消滅の畏:「増田レポート」と人口減少社会の正体 山  
下祐介／地方消滅 - 東京一極集中が招く人口急減 増田寛也／超高齢・人口減少時代に立ち向かう-新たな公共私連携と原動力とし  
ての自治体 日本都市センター／縮小ニッポンの衝撃 NHKスペシャル取材班／人口減少と少子化対策 高橋重郷／シンギュラリ  
ティは近い レイ・カーツワイル／2014年教室ツーウェイ1月号 向山洋一氏論文／子ども観光大使資料 TOS 栃木／目指せ  
2014栃木県子ども観光大使 TOS 栃木／人工知能は資本主義を終焉させるか 斎藤元章・井上智洋／人口減少と社会保障 山  
崎史郎／限界国家 毛受敏浩／人口と日本経済 吉川洋／日本人はどこまで減るか 吉田隆彦／世界と日本の人口問題 少子高齢社  
会 鬼頭宏／世界と日本の人口問題 人口問題にたちむかう 鬼頭宏／世界と日本の人口問題 移動する人口 鬼頭宏／世界と日本  
の人口問題 心える人口へる人口 鬼頭宏／世界と日本の人口問題 地球の人口を考える 鬼頭宏／世界と日本の人口問題 少子高  
齢社会 鬼頭宏／小学校学習指導要領 社会科編、総合編／学習指導要領ポイント総整理 東洋間出版社編集部／地域ブランドのつ  
くりかた /ふるさとが元気になる『地域絶品づくり』のすすめ 吉川京二／地域のマーケティングの核心 佐々木茂／B級グルメが  
地方を救う 田村秀／人口減少社会への対処法を明かす AIで「未来の年表」はこう変わる 河合雅司 井上智洋／人口減少が加速す  
る今、限界集落で何が起きているのか？10分で読めるシリーズ／老いる家 崩れる街 住宅過剰社会の末路 野澤千絵／まちづくり  
メインバウンド 成功する「7つの力」 中村好明／ほしい暮らしは自分でつくる ぼくらのリノベーションまちづくり 嶋田洋平／  
日本の祭り 解剖図巻 久保田裕道／人工知能を超える 人間の強みとは 奈良潤／未来の年表②河合雅司／未来の年表人口減少危  
機論のウソ 高橋洋一／二ホンの神様・聖地マップ 記紀と神社をめぐる会／まちづくりの非常識な教科書 吉川美貴／福岡市を運営  
する 高島総一郎 著／小学校学習指導要領 社会科編／熱海の奇跡 市来広一郎／稼ぐまちが地方を変える 誰も言わなかった1  
0の鉄則 木下斉／外国人が熱狂するクールな田舎の作り方 山田拓／凡人のための地域再生入門 木下斉／福岡市が地方最強の都  
市になった理由 木下斉／湯布院モデル 大澤健・米田誠司／ビレッジプライド 「0円企業」の町をつくった公務員の物語 寺本英  
仁／新世界 西野亮廣／コミュニティ・スクール 地域とともにある学校づくり実現のために 佐藤晴雄／未来の学校づくり コミュ  
ニティ・スクール導入で「地域とともにある学校へ」木村直人・相田康弘／京都 コミュニティ・スクール物語・御所東小学校の軌跡